

# 幼児教育を学ぶ人への造形指導の現場から

木俣 創志

## 1. ミューズ神の“囁き”

芸術家にインスピレーションを与えるとされるミューズ神は、作家活動を続けながら指導に勤しむ者に、「あなたには“つくる喜び”を伝える役目があります」と囁きます。楽しいこと・面白いことで溢れるこの時代に、それでも尚ひたむきに自身の作品に向かって制作の手をとめようとしない美術の教員は、日本に今、どれくらい存在するのでしょうか。

彼らは、様々なものを犠牲にしても制作することに喜び・生き甲斐を見出しているに違いありません。こういう人々は、(ソクラテス風の言い方をすれば)創作の本質的な楽しさを知っているということです。その苦しさを含めて「つくる」喜びを伝える条件を備えているということです。

逆の場合、自身が制作に携わらない美術の教員というのは、(これまたソクラテス風に言えば)他のことを犠牲にしてまで「つくる」ことを好まない、あるいは「つくる」楽しさを本当は知らない可能性がある、ということです。つまり、論理的には、創作する喜びを作家ほどには伝えることが出来ないということになります。

厳しい言い方になりましたが、全ての美術の教師は、制作活動をするにせよしないにせよ、この論理的帰結「制作活動する教員は、“つくる喜び”を伝える資格がある」というミューズ神の“囁き”を不問にすることが出来ず、それを出発点として、自身の立ち位置を決めていかねばならないのではないのでしょうか。

## 2. 作家が教えることの本質

誤解のないよう述べておきますが、私は作家活動をしない教員の立場を否定するつもりなどありません。様々な先生がいてよいと思います。

例えば、制作時間を投げ打ち、学生

たちの喜ぶ顔を思い浮かべながら教材研究に励み、生徒個々への目配りを充実させていくタイプの教師は、何ものにも勝る強みがあります。また、制作したくとも出来ない状況も多々あるでしょう。制作しないことの理由には、

一言では語れぬ計り知れないドラマも存在するに違いありません。

私が述べたいことは、美術の技術的な事柄や How to が現代のインターネットや TV、書籍等のメディアに溢れ、それらを誰もが容易に手に入れることの出来る世の中であればある程、美術教育において至極大切なことが伝わりにくくなっているという点です。

何故、私たちは「つくり、えがく」のか。それは、実践によってのみ気づき理解し身につくことであり、このことをしっかり伝えることこそ、美術の授業という「現場」の本質的使命ではないでしょうか。

余談になりますが、ポスト印象派のポール・セザンヌは、特に晩年、絵を描くこと以外には殆んど興味を示さず、「絵を描きながら死にたい」と述べてその通りの人生になりました。あまり知られてはいませんが、実際、彼が国外へ旅したのは生涯で一度きりの家族サービスでした。

莫大な遺産を受け継ぎ、自由な時間と財力に恵まれた画家としては大変不思議に感じる人も多いでしょう。おそらく、彼の生活のすべては絵を描くことに捧げられていたのかもしれない。

### 3. 幼児教育を学ぶ学生への指導・その現場

私は、縁あって計5つの大学で幼児教育を志す大学生の造形指導を17年にわたって行ってきました。その仕

事に就き、気づいたことがあります。

保育、幼児教育の志望者には、美術・造形に対して不要な苦手意識をかかえている学生や、ある種の“アレルギー”を持っている人が少なくないという事実です。

年頭と年末に実施するアンケートが、次第にその現実を浮かび上がらせてきました。ある年の私にくれた学生たちの寄せ書きは、「嫌いだった図工・美術が好きになった」といった内容で埋め尽くされたほどです。

幼児教育を学ぶ学生の多くは、常に、美術に対するある種の先入観——例えば、写実優先主義や、いわゆる技術(上手さ)優先の、誤った美術観ないし狭い造形の観念を抱いて入学してきており、さらには「つくること・かくこと」の楽しさを実感したことさえなく、場合によっては美術を嫌いになってしまっているケースが存在することを、こうして私は実践の場で明確に知ったのです。

そして現在でも「美術や図工が苦手・嫌いだったが、初めてその楽しさを知った」という主旨の私の授業に対するアンケート・コメントが後を絶ちません。

ある短大の保育学科の先生が、次のように述べています。「学生に美術は好きか?と聞いたことがある。するとクラスの半分は『嫌い』もしくは『苦手』に手を挙げた。しかし人間は本来、ものを作り出す事や表現する欲求を持つ

ている。生まれ育っていく環境のどこかで、苦手意識を植え付けられていると考える。」(注)

全国の幼児教育の造形指導の教員は、多かれ少なかれ、このような状況に直面し苦慮しているのではないだろうか。

#### 4. 英語を喋らない英語の先生

自分勝手な(=少しくらい違った)英語で喋ってもかまわないんだ、ということを知った途端、急に英会話が上達した、という話を聞いたことがあります。学習者のなかにある「適格かつ理想的な」英語などこの世に存在せず、言葉は一人ひとりの生身の人間の発する伝達手段である。それを腹に据え、伝えたい意志を強くもって自分の言葉

で語ればいい、修正は後からいくらでも出来る、といった悟りです。

英語をちっとも喋れず試験問題作りに長け、細かな用法の誤りを指摘する“英文法”の先生に、英会話を教わりたくはありません。同様に、“描き方の方法”をたくさん知っているにもかかわらず自分の絵を描かず、成績(点差)をつけることの上手い先生が存在するとしたら……そのような教員から美術を学びたくないし、否、学ぶことは不可能でしょう。

活き活きした会話や魅力溢れるアートの世界への指南者は、心から会話を楽しみ心から制作を愛する者であることが、まず第一の条件ではないでしょうか。

#### 5. 作家活動する美術教員への期待

就学前の造形活動(造形教育)は幼児教育の中核のひとつであり、個々の人間形成にとって必要不可欠であることは、あらためて述べるまでもありません。そして、一般に日本人は繊細で器用であると言われているにもかかわらず、幼児教育を学ぶ学生自身が造形に対してきわめて消極的な意識ないし苦手意識を抱いたままです。としたら——謙遜な国民性を割り引いたとしても——これは大変残念なことです。

少なくとも「つくること・かくこと」を好きと思える感性を育てその意欲を培うことを、小中高の一般教育の図工・美術科目で第一義的に優先するべきで



作品を展示する学生たち

あり、その過程で、最低限「つくること・かくこと」を嫌いにさせてしまう失敗に至らぬような配慮が必要です。さもなければ、最初から学校の授業を受けさせない方が良かった、ということにもなりかねません。

それにしても、幼児の頃は夢中で「かく・つくる」を楽しんでいた人が、どのような経緯で造形に対して要らぬ苦手意識を抱くようになり、嫌いにさえなってしまうのか。

単純には語れぬ複雑な理由があるものと思われませんが、私は、(誰かを批判して〇〇を直せ、といったことでなく)何にもまして制作活動が続ける教員の力を期待したいと考えています。

制作に生き甲斐を感じる教員が一人でも多くなり、そのような先生が、ほんの少し自身の授業を工夫していきさえすれば、こうした事態は起こりにくいのではないかと考えています。

「科目として存在するから授業をやる」のではなく、「何故この科目が人間にとって必要か」を授業出来る人、その答の証となるような人が教壇に立つことが、大変有効な手立てではないかと思うのです。

注：香月欣浩著『美術の授業実践から』四條畷学園短期大学紀要 41号 2008年、p59

静岡福祉大学

静岡県立大学短期大学部

静岡英和学院大学 昭和女子大学

非常勤講師(美術・造形)